

戦後日本における公立図書館の平面構成の変遷

村松 ななみ

日本において、現在に通じる公立図書館が始まったのは第二次世界大戦後のことである。以来、図書館は常に時代や利用者の要望に応えるために変化してきた。近年はインターネットの普及が進んだことによって利用者が図書館へ行く必要性は減少しているが、公立図書館には市民が集うための場所や空間としての役割が期待され、これまでとは異なる建築的特徴を持つと指摘されている。

図書館施設の構成をみるうえで基本となる平面構成について、先行研究では、分析対象とする図書館の運営上の特徴や規模、建設年を限定した上で、中心的な役割をもつ一部の空間（一般書架、カウンター、閲覧室など）の配置関係を類型化しているものが多い。しかし、平面構成は図書館の発展過程など様々な要因の影響を受けているため、分析対象を限定することで要因による平面構成の特徴が抜け落ちてしまうという課題がある。

そこで本研究では、戦後から現在までに建設された公立図書館の平面構成について、一貫した体系的な分析を行い、変遷を明らかにすることを目的とする。

研究方法は文献調査と平面図分析の二つである。文献調査で図書館建築および図書館の平面構成に関する過去の記述を整理し、加えて量的な平面図分析を行うことによって相互補完的な考察が可能になる。まず文献調査によって図書館建築の発展の歴史や平面構成に対する専門家の意見を抽出し、整理した。次に平面図分析では、1950年から2018年までに建設された日本の公立図書館のうち詳細な平面図が入手できた166館から100館を無作為抽出し、その平面図について、①外形、②面積、③スペース配置の特徴と開館年との関連を見出した。

文献調査の結果、図書館建築の発展における年代の区分を1945年～1962年、1963年～1979年、1980年～1990年代前半、1990年代後半～2018年に設定し、社会的背景や図書館の発展上重要である出来事、当時の図書館建築の特徴を整理することができた。平面図分析では、近年の事例については、1990年代後半以降に複雑な外形をもつ事例が増加し、延床面積10,000㎡以上の大規模図書館が以前と比べて増加していること、1990年頃を境に図書館の出入口付近に配置するスペースとして喫茶・カフェやフリースペース、展示スペースなどが選択されるようになってきていることが明らかになった。1990年代後半以降で以前と異なる特徴が見られるのは、戦後直後と比べ図書館に対する市民の認知度が飛躍的に上がったことに加え、1986年に教育改革第二次答申により生涯学習体系への移行が発表されてから、図書館が生涯学習の中心施設として万人を受け入れる雰囲気づくりを求められるようになったからだと考えられる。どの利用者も気軽に入館でき、快適に過ごすことができる多様な空間づくりのための工夫が、このような平面構成の特徴として現れている。

(指導教員 小泉公乃)